

キャラクター名  
黒銀 帛華 (くるがね びゃっか)

プレイヤー名

シンドローム	ソラリス		ワークス	何でも屋	カヴァー	風紀委員長
	ブラックドッグ					
オプション			年齢	17歳	性別	女
覚醒	感染	衝動	憎悪	初期侵食率	36	%
出自	天涯孤独	経験	大きな転機	邂逅		

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	36
肉体	2	1	3	1		7	行動値	4
感覚	1	0	0			1	(非装備時)	4
精神	2	0	0			2	戦闘移動	9
社会	3	0	0			3	全力移動	18

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	3		射撃			RC			交渉		
回避	1		知覚	1		意志			調達	1	
運転:			芸術:			知識:			情報: 噂話	2	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
徒花の剣	白兵	7r-4	2	17		

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
メモリー: 匂宮狂璃の両親	

合計装甲: 0    合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイムス	消費
遺産継承者: 徒花の剣P		N		
匂宮狂璃	P 執着	N 悔悟		
真改	P 遺志	N 嫌悪		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 8    残り財産P:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
加速装置	3	2	セットアップ	至近	自身	自動		
効果: 行動値+[Lv×4]。								
コンセントレイト:ブラックドッグ	2	2	メジャー					
効果: C値-Lv。								
腐食の指先	1	2	メジャー	武器	単体	対決		
効果: シーン中対象の装甲値-[Lv×5]。								
アタックプログラム	5	2	メジャー	武器		対決		
効果: 命中判定の達成値+[Lv×2]。								
ブレインハック	1	10	メジャー	至近	単体	対決		
効果: 対象に憎悪付与。シーン1回。								
タブレット	3	2	オート	至近	自身	自動		
効果: 「射程:視界」に変更。シーンLv回。								
多重生成	2	3	オート	至近	自身	自動	リミット	
効果: タブレットと同時使用。対象を[Lv+1]体に。								
	★							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

徒花の剣  
斬った者の精神に強く干渉することが出来る。平和を願って戦い、その結果無辜の人々に殺された女傑が使っていた刀。契約者の体と一体化し、深く根を張る。また、戦闘時にのみ展開される。

あなたは《ブレインハック》(『EA』P68)を1レベルで取得する。取得に経験点は必要なく、経験点を消費して成長させることができる。また、この武器は「常に装備している」状態となり、ほかの装備は装備できなくなる。この武器を装備から外すか、または破壊された場合、バッドステータスの暴走と憎悪(対象は自身)を受ける。

契約者は他人の幸福のために戦うことを求められ、剣の意思と対話を求められ、装備中は延々と憎悪を喝かれる事となる。侵蝕基本値を+4する。

物心ついた頃から両親と呼べる存在は居らず、匂宮の分家に拾われ下女として住み込みで働いていた。その時歳が同じということもあり、その家の娘である匂宮狂璃と仲良くなった。彼女は活発で、少し危なっかしいところのある人物でよく家を抜け出しては一緒に色んな場所へ行っていったものだ。ある日いつものように彼女は家を抜け出し、それを追った私に向かって彼女は山に登ろうと言いつつ出た。止めないと叱られるであろうことはわかってはいたものの、山に行くというだけでもその冒険は幼い子どもにとって断るにはとても魅力的で、ついていってしまった。そしてその山を登っていくと、山奥に寂れた神社が見つけたのだ。幼かった私たちは好奇心の赴くままに調べるが、特に目立ったものもなく次第に興味が薄れていったのだ。しかし、暫く探索しているうちに古めかしい蔵を見つけ、それはそれまでの退屈を吹き飛ばすには十分で、私たちは我先にと蔵の方へ向かっていった。……背後から迫る怪物にも気がずい。反応できたのは彼女だけだった。彼女は私を咄嗟に庇い、重傷を負って意識を失った。怪物は私ではなく、彼女に向かっていった。私は情けないことに恐怖で動けず、それを見ているだけ……そう思われた。しかし、そうではなかった。その時、私の頭の中に声が響いたのだ。私には不思議とそれが蔵の方から聞こえているのだとわかった。